

学生との協働による CHUKYO MaNaBo (LMS) 活用推進の取組と課題

満田 清恵, 角谷 充彦

中京大学 学術情報システム部

k-mitsuda@mng.chukyo-u.ac.jp

Efforts and Issues for Promoting Utilization of CHUKYO MaNaBo (LMS) through Collaboration with Students

Kiyoe Mitsuda, Mitsuhiro Kakutani,

InformationSystem and Library Department, Chukyo Univ.

概要

中京大学（以下「本学」と略記）では 2011 年より全学的に導入してきた CHUKYO MaNaBo (LMS) を 2017 年 9 月から半年間の並行期間を経て、2018 年 4 月に新システムへと完全移行した。

新 CHUKYO MaNaBo は、シラバスシステムを内包している点が特徴で、学生は受講している授業について、授業計画や学修到達目標を確認しながら学習を進めることができる。教員側のメリットとしては、シラバス作成と授業管理が一つのシステムで行えること、シラバス作成時に入力した授業計画が自動的に担当科目のページにも反映されることで、授業計画に沿った教材作成がしやすいことにある。こうした特徴を活かすことで、効果的な予習・復習課題の提示が可能となった。これらの利点を教員に周知し、利用者を増やすために学生と協働で行った活動の成果と課題を報告する。

1 はじめに

昨今多くの大学では授業支援のツールとして何らかの e-ラーニングシステムが導入されている。本学でも CHUKYO MaNaBo という学内名称でシステムを導入しており、一定数の教員が授業支援に利用してきた。導入後 6 年を経過し、都度都度の部分改修を重ねてきたが、CHUKYO MaNaBo はその機能および役割が今日の IT 環境、高等教育において求められるものとかい離が大きくなってきたことから、2017 年 9 月の秋学期開始に合わせ、新システムの稼働を開始し、2018 年 4 月春学期より新システムへの完全移行し正式稼働した。

本稿ではシステム移行時に懸念される問題点を記し、それらの解決のに向けた学生との協働による活用推進の取組とそれにより新たに明らかになった課題を報告する。

2 新システム選定の背景

本学ではこれまで、教職員の利便性を優先し、多くの学内システムをスクラッチ開発してきた。オーダーメイドのシステムであることから、開発時の最優先課題に対応できること、積極的に活用を考える教職員のニーズをくみ取ることができることはメリットではあるが、他のシステムとの整合性に欠け、担当者個人に依存したシ

ステムになりがちであった。

2.1 ソフトウェア製品選定ポリシーの作成

適切なソフトウェア製品の選定を行うため、まずは業務ソフトウェア製品の選定ポリシーを定めることから新 CHUKYO MaNaBo のシステム更新に向けた議論はスタートした。ワーキンググループにおける分科会での複数回の議論において「業務ソフトウェア製品選定ポリシー」を作成し、情報センター委員会にて承認を得た。

■中京大学「業務ソフトウェア製品選定ポリシー」 (2016 年 6 月 29 日情報センター委員会承認)

- ① 選定目的（目標）を明確にし、最終的に学生の利益となるものとする。決して選定することを目的としない。
- ② 既存業務ソフトウェア製品との差異を明確にし、全体最適を図り極力既存製品への統合を図る。学内の複数製品をユーザーはシングルサインオンにて利用できるものとする。
- ③ 選定について 5 年以上の長期利用を前提と考え、利用延長はバージョンアップを基本とする。選定時は主にパッケージ製品を選択候補とする。長期利用、トータルコスト削減の観点から極力カスタマイズは行わないものとする。
- ④ 特定のハードウェア、OS、ミドルウェア、ブ

ラウザーに依存しないものとする。またサーバー等のハードウェアは技術員の養成を含めた BCP（事業継続計画）および教育への効果や回線の質と利用料等を含めた総合的な費用対効果を考慮し、設置場所や提供(運用)事業者を検討するものとする。

- ⑤ 運用者（運用組織）は選定時より選考メンバーとして選考プロセスに参加し、運用開始後は最適な運用が行われるよう常に改善活動を行うこと。

2.2 新 CHUKYO MaNaBo の要件作成

新 CHUKYO MaNaBo は、新たに定められた業務ソフトウェア選定ポリシーに基づき、新 CHUKYO MaNaBo は学生の授業内外の主体的な学習を支援し、双方向型の能動的な学習を推進するプラットフォームにするという共通理解のもと、LMS としての基本的な機能を具備していることと合わせて、教育の質の向上につながる内容を要件として優先事項とした。

2.3 新 CHUKYO MaNaBo の基本システム

新 CHUKYO MaNaBo でのシラバスシステム内包機能の実現性と、過不足ない基本機能が具備されている VerSion2 社の Glexa を基本システムとして採用することとした。

『学習に必要な「読む・書く・聞く・話す」の 4 技能を網羅した eラーニング機能が特徴的。また、受講者の成長へとつなげるポートフォリオや協調性を高めるグループやコミュニケーション機能などを採用した、今までにない新しいラーニングマネジメントシステム』¹

3 新 CHUKYO MaNaBo 移行期の課題

先述の同社ウェブサイトにある製品説明にあるとおり、同社製品は教材作成機能が充実しており、動画や録音機能を使用した教材の作成も可能なことも優れた点であるが、多機能がゆえに ICT に抵抗感のある教員は利用を避けるのではないかと懸念があった。

また、旧システムとの並行利用期間を半年設けることにより、旧システムが稼働している期間中に新システムへの移行が積極的に行われないことによって生じる問題もあるのではないかと考えた。

これらのことから次の 3 点を解決すべき課題として挙げた。

1. 新システムに対する心理的抵抗感の低減
2. 正式稼働開始時の質問対応業務の効率化
3. 無償の代替サービス増加によるシステム利

用者の減少

4 活用推進の取組と成果

CHUKYO MaNaBo の刷新にあたり、100 ページを超えるマニュアルを準備した。また教員に対してハンズオン研修を名古屋キャンパス 2 日間（2017 年 7 月、2018 年 3 月）、豊田キャンパス 1 日間（2017 年 7 月）実施。各回およそ 3 時間実施した。

研修内容について参加者アンケートを実施したところ、システム全体の解説を体系的に行うのではなく、個々の目的に合わせすぐに使えるよう機能ごとの解説を希望する声が多かった。

4.1 学生アルバイトによるビデオマニュアル作成

ビデオマニュアルの作成は職員監修のもと、情報システム課にて雇用している学生アルバイトが行った。学生アルバイトは情報センターサービスの支援業務のために雇用されており、これまでも情報リテラシーに関する動画を作成しては、1 週間に 1 回新作動画を動画投稿サイトにアップロードしてきた経験をマニュアル作成に活かすことができた。

旧 CHUKYO MaNaBo での教員利用率の高い機能および利用説明会アンケートで聴取した意見をもとに、ニーズの高い機能の操作方法について、ビデオマニュアルを作成した。

ビデオマニュアル作成の副次的な効果として、全ての学生アルバイトが何らかの形で動画作成に携わったことで、对学生だけでなく、教員からの質問に対しても、初歩的な内容であれば学生アルバイトが対応できるようになったことが挙げられる。

これにより職員と学生アルバイトによる対応レベルの切り分けができ、効率的な質問対応につながった。

4.2 学生アルバイトを軸とした情報の収集と展開

新 CHUKYO MaNaBo の学生の利用開始は、2017 年 9 月の秋学期開始後からであったことから、開講期間中である 7 月より学生の利用が多い学内施設の各所にシステム更新を周知するポスターを掲示した。

また、一般学生が利用を開始する前に、学生アルバイトに新システムの操作を体験してもらうことによって操作性などに対する意見を収集し、窓口対応用の Q&A を作成した。

併せて一般学生の利用開始後は、学生アルバイトを通じて授業での利用状況や周囲の学生らの状況を聴取し、ビデオマニュアルや窓口対応

用 Q&A のアップデートなど新 CHUKYO MaNaBo に関する草の根レベルの情報収集と、それに呼応した支援情報の展開を実施した。

こうした小さなサポートの積み重ねにより、大きな混乱をきたすことなく、新システムのリリースをスムーズに展開することができたと考えられる。

4.3 正式稼働後の教員利用者数について

新システム移行期に最も懸念していた遅鈍な質問対応等による利用者数の減少であるが、旧システムとの並行期間中であつたにも関わらず、前年度の利用者数に対して約 85% (153 人/179 人) の利用があつた。

旧システム利用者数 179 人は 1 年間の利用者数であることを踏まえると、むしろ 85% が新システムを利用したと言えるのではないだろうか。

5 今後の課題

2018 年 4 月より旧システムとの並行期間が終了し、CHUKYO MaNaBo は完全に新システムに移行した。2017 年 7 月のリリースから 1 年が経過した 2018 年 7 月末現在の教員利用者数は、2016 年度の 179 人をわずかに上回る 200 人となった。また非常勤講師の利用者数も専任教員同様に増加した。

結果、システム移行に伴う利用者数の減少は避けることができたが、利用されている機能・用途は従前のシステムとほとんど変化が見られないことが操作ログから明らかになった。

このことから、今後は操作方法などのハードスキルの支援に加え、教育の質を高めるための授業設計に関する研修の企画や、教員ユーザ同士が活用事例や知見の共有を図れるコミュニティの形成などの教員支援が重要だと考える。

また、今回学生アルバイトは学びの主体として学生の視点から貴重な意見を提案してくれたり、普段の学生生活において、友人や部活・サークルの後輩らの質問に答えたりという対応を行ってくれた。これら学生同士の学びあいの気風を醸成していくことは本学のみならず教育機関において非常に重要なことであると考えられる。

現在、本学ではノートパソコン必携化導入の準備を進めている。必携化が実施された際には、学生によるピアサポートの重要性と必要性は格段に高まると予想できる。こうしたことを踏まえ、情

報システム課で雇用している学生アルバイトの組織作りも今後の課題として取り組んでいくこととしたい。

参考文献

- [1] 角谷充彦、棚橋猛、満田清恵、中京大学新 MaNaBo(e-ラーニングシステム)の導入、大学 ICT 推進協議会年次大会、FF-3 : LMS、2017.
- [2] 満田清恵、森純菜、東玲名、学生と育てる LMS~CHUKYO MaNaBo 活用推進の成果と課題~、SPOD フォーラム 2018 ポスターセッション、2018.

ⁱ VeSION 2 社ウェブサイト URL
<https://ver2.jp/product/glexa/>